

助成番号	21-G20
------	--------

松下幸之助記念志財団 研究助成

研究報告

(MS Word)

【氏名】

田中あき

【所属】（助成決定時）

東京外国語大学大学院総合国際学研究科博士後期課程

【研究題目】

仏領インドシナにおける植民地文学：ベトナム語作家カイ・フンを中心に

【研究の目的】（400字程度）

本研究では、仏領インドシナの一部であったベトナム・ハノイで、1930-1940年代に活躍した文学グループ自力文団の主要メンバー、カイ・フンの後期文学作品(1938-1946)を取り上げ、植民地文学という観点から論考を行う。

これまで、カイ・フンの前期活動に光が当てられてきた一方、カイ・フンの後期文学には、ほとんど目を向けられてこなかった。本研究を進めることにより、フランス植民地期→日本軍進駐期→独立宣言→インドシナ戦争勃発に至る過程において、こぼれ落ちた歴史の現実が垣間見え、当時の複雑な社会的・植民地主義的状況、根無草となった青年知識人の心理、小説家というある意味客観的見地から見た独立闘争とナショナリズムの高揚など、現在ベトナム国内で流通している既存の資料とはまた別の観点から見た当時のベトナムの諸相が明らかになる。また、厳しい言論統制下で編み出された、検閲を潜り抜ける戦略としての寓話の手法が見いだされ、政治・社会的状況を照らし合わせて解釈することで、カイ・フン文学の新たな読みの可能性が呈示される。

【研究の内容・方法】（800字程度）

研究対象となる時代は、フランス植民地期から日仏共同支配期(1941-1945)、そして独立宣言(1945)を経てインドシナ戦争勃発前夜(1946)までであり、政治的・歴史的、さらには文化的・社会的に非常に複雑な時代である。なお、1945年のベトナム民主共和国の「独立」は国際社会に承認されず、ついに抗仏戦争勃発に至ったが、本研究では、このような植民地がしばしば辿る宿命

としての、植民地主義の継続性および植民地支配による負の遺産を視野に入れ、本研究で扱うカイ・フンの文学作品を一貫して植民地文学として扱っていく。

また、当時の世界情勢や時代精神を考慮に入れ、かつ文学以外の周辺史料を活用しながら、トランスナショナルな姿勢および志向性をもって分析を行っていく。植民地における近代化さらにはナショナリズムの高揚といった諸局面において、二項対立的思考および二分法に沿った態勢が顕著となっていくなか、いかなる文学が営まれたのかを、カイ・フンの後期テクストを用いて明らかにしていく。主な研究方法としては、検閲下或いは自己検閲下という言論の自由が抑圧されたなかで生成されたテクストに込められた、二重の読みの可能性（両価的意味）を探ることで、テクストの再解釈を試み、カイ・フンの既存の評価を解体していく。また、カイ・フンの文学が映し出した植民地体制の様相、そこで生を営む個々人の有り様や心理状況を観察し、現行体制下の歴史認識では窺い知れない時代の複雑性を露わにしていく。

本研究では、植民地文学研究およびベトナム地域研究の両面から、カイ・フンの文学および思想、さらに政治的態度にアプローチしていく。東西の融合を体現するかのような人物であり寓意^{アレゴリー}を巧みに用いたカイ・フンの文学、とりわけ支配者による言論統制が取り払われた時期(1945-1946)の彼の文学は、植民地だけでなく「ポスト=植民地」が抱える状況の複雑さを窺い知る興味深い材料となることであろう。

【結論・考察】（４００字程度）

カイ・フンの後期文学および諸活動とは、曖昧性と両義性そして流動性を有し、それゆえに近代化・植民地化・独立闘争に伴う、二項対立的傾向を超越したものであったことが明らかになった。結果的にカイ・フンの文学を通して、モノローグ的な公式見解あるいは公的刊行物では省かれたであろう、当時のベトナムの政治・社会の極めて複雑な状況が、新たに発見されるに至った。

このような文学が創り上げられた要因を探ろうとするならば、文学者カイ・フンが、時間と空間の両方が極端に凝縮された植民地近代、即ち「圧縮された近代」において生を営んでいたことが挙げられよう。中国文化・フランス文化・ベトナム文化などとともに、雑種の経験から生ずる思考および言論は、いずれかを選択し一心に邁進することへの不信感・懐疑心に包まれ、それが作品の多義性・重層性につながった。なお、思想的要因としては、カイ・フンが中道の精神性を帯びた仏教者であったことを挙げることができよう。